

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32639

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02458

研究課題名（和文）イエナ・プランにおける「混合」を用いたインクルーシブ教育に関する研究

研究課題名（英文）Research on inclusive education using "Mischung" in the Jena Plan.

研究代表者

佐久間 裕之（SAKUMA, Hiroyuki）

玉川大学・教育学部・教授

研究者番号：70235208

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：インクルーシブ教育の源流と評されるイエナ・プランについて、草創期にあたる1924年のイエナ大学附属学校における実践の記録と、1927年の主著『自由で一般的な国民学校のイエナ・プラン』の思想を中心に研究を行った。イエナ・プランの源流・原点となるイエナ大学附属学校でのインクルージョンの生成と、それを支えるペーター・ペーターゼンの思想をひも解くことが、本研究の眼目であった。コロナ禍に巻き込まれ、現地での調査について2年間の期間延長を余儀なくされた。しかし、インクルーシブ教育の基本思想と、イエナ・プラン草創期の思想・実践を研究し、そこから日本におけるインクルーシブ教育の展開へ向けた示唆が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、インクルーシブ教育の源流と評されるイエナ・プランについて、草創期にあたる1924年のイエナ大学附属学校における教育実践の記録を中心に分析し、そこからインクルーシブ教育におけるイエナ・プランの位置づけを「内的学校改革」の文脈で明確化した。インクルーシブ教育が共通の枠組みとして重視されている現代日本の教育界において、制度改革からではなく「内的学校改革」からインクルーシブ教育を展開するのに有益な示唆を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the Jena Plan, which is regarded as the source of inclusive education, based on the records of practice at the Jena University School in 1924, the pioneering period of the Jena Plan, and on the ideas in the main book, Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule, published in 1927. The aim of the study was to unravel the creation of inclusion at the Jena University School, the source and origin of the Jena Plan, and the ideas of Peter Petersen that underpinned it. The Corona disaster forced a two-year extension regarding the research in the field. However, the basic philosophy of inclusive education and the ideas and practices of the pioneering period of the Jena Plan were studied, and suggestions for the development of inclusive education in Japan were obtained from this research.

研究分野：教育学

キーワード：イエナ・プラン インクルーシブ教育

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号 19K02458)
イエナ・プランにおける「混合」を用いたインクルーシブ教育に関する研究
(2019年度～2023年度)研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

現代日本の教育界では「インクルーシブ教育 (inclusive education)」が共通の枠組みとして重視されている。平成 29 年 3 月に公示された小・中学校学習指導要領及び平成 30 年 3 月の高等学校学習指導要領等は、我が国で「障害者の権利に関する条約」への批准後に改訂された初めての学習指導要領である。そこでは「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という学校と社会に共通の理念が示され、子供たち一人一人の調和的な発達に配慮する取り組みも求められている。このような取り組みは、各学校における教育課程の編成、各教科等の指導計画、学習・指導方法や評価方法の改善・充実に留まらず、子供たちが過ごす学校生活の再考をも促すものである。様々な背景を持つ子供たちが共に生きる場としての学校をいかに捉え、いかなる学校生活を実現するかが重要となる。ユネスコとスペイン政府の共催による「特別なニーズ教育に関する世界会議：アクセスと質」での「サラマンカ声明」(1994年6月)が示すように、様々な障害を抱える子供たちだけでなく、特別な英才児や言語的・民族的・文化的マイノリティーの子供たちなど、インクルーシブ教育は現実社会を反映して多様なニーズを包括している。

筆者はこれまで、学校を子供たちの生活共同体、すなわち共生社会と捉え、その創出のためにイエナ大学附属学校で1924年から内的学校改革に取り組んだペーターゼン (Peter Petersen) に着目して研究を行ってきた。この改革の思想・実践は、1927年以降「イエナ・プラン (Jena-Plan)」(参考文献・資料) と呼ばれ、今日に至っている。近年、イエナ・プランはインクルーシブ教育との関連で論じられている (参考文献・資料 88 頁)。イエナ・プランを牽引してきた人物の一人・ザイツ (Oskar Seitz) がインクルーシブ教育とイエナ・プランの原則との一致を示唆している通り (参考文献・資料)、イエナ・プランが実践してきた異なる年齢・階層・能力の男女の「混合 (Mischung)」による学校生活の展開を詳細に明らかにすることは、今日我が国で求められているインクルーシブ教育の思想と実践の構築に貢献できるものと期待される。

2. 研究の目的

本研究は、今日我が国で求められているインクルーシブ教育の思想と実践の構築に貢献するため、インクルーシブ教育との関連で捉えられているイエナ・プランについて、草創期にあたる1924年のイエナ大学附属学校をはじめ、実践校の「混合」によるインクルージョン生成の実際と、それを支える創始者・ペーターゼン (Peter Petersen) の思想解明を目的としている。

3. 研究の方法

本研究では、ペーターゼン自身が行った「混合」によるインクルーシブ教育の先駆的な取り組み (1924～1950年) についての文献・資料、とりわけ彼がイエナ大学附属学校での教育実践について公表した最初の実践報告書 (参考文献・資料) とイエナ大学文書館に所蔵されている未公開の実践記録 (Bestand S Abt. I)、現代ドイツのイエナ・プラン校の実践から、イエナ・プランにおける「混合」によるインクルージョンの特質を把握する。さらにイエナ・プランの主要著作 (参考文献・資料) によってペーターゼンにおけるインクルージョンを支える思想を把握する。コロナ禍に巻き込まれ、現代ドイツのイエナ・プラン校については、バーデン＝ヴュルテンベルク州 (Evangelische Jenaplanschule am Firstwald)、テューリンゲン州 (Jenaplan-Schule Jena, Staatliche Gemeinschaftsschule Weimar, Evangelische Grundschule Erfurt)、ベルリン州 (Peter Petersen Schule)、そしてノルトライン＝ヴェストファーレン州 (Rosenmaarschule) 各校の訪問調査に限定せざるを得なかった。

4. 研究成果

(1) イエナ・プランにおける「混合」のインクルーシブ教育における位置づけ

イエナ・プランの大きな特徴として挙げられているのは、年齢別学年級制を廃止し、異なる年齢・階層・能力の男女を混ぜ合わせた「基幹グループ (Stammgruppe)」によって学校生活を組織することである。この異なる年齢・階層・能力の男女を混ぜ合わせることで、これが「混合 (Mischung)」である。インクルーシブ教育における「混合」の位置づけは次の3点にまとめられる。まず1点目として、「混合」はインクルージョンの2類型である「プロセスとしてのインクルージョン」と「フル・インクルージョン」のうち、後者の「フル・インクルージョン」に分類できる。「プロセスとしてのインクルージョン」は、「通常学校」で行われる最終的な到達点としての「フル・インクルージョン」へ至る過渡的な対応策であった。しかし「混合」はそのような暫定的な作用ではない。それは「特別学校」ではなく「通常学校」の中で徹頭徹

尾、恒常的に行われる営為である。ただし「混合」の場合、「特別学校」の否定を目指すわけではない。この点は留意が必要である。

2点目はインクルーシブ教育の3類型(単線型アプローチ、多重路線型アプローチ、二路線型アプローチ)に照らすことで明らかになる。「混合」は「単線型アプローチ」に属していると言える。つまりインクルーシブ教育をすべて普通教育内で行おうとする立場に立つ。ドイツで生まれたイエナ・プランであるが、そのドイツの大勢は「二路線型アプローチ」である。現在、ドイツで「多重路線型アプローチ」への移行はみられるが、「混合」はそれを凌駕する「単線型アプローチ」の立場をとっていると言える。

最後の3点目は「サラマンカ声明」におけるインクルーシブ教育のまなざしと比較することで明らかになる。すでに示したように、「サラマンカ声明」は「すべての子供たち、とりわけ特別な教育的ニーズをもつ子供たち」として「障害児や才能のある子供たち、ストリート・チルドレンならびに路上で働く子供たち、遠隔地や遊牧民の子供たち、言語的・民族的・文化的マイノリティーの子供たち、その他の恵まれない地域やグループの子供たちが含まれる」(参考文献・資料 6頁)としていた。一方、イエナ・プランの「混合」では、異なる年齢・階層・能力の男女を混ぜ合わせることを目指していた。イエナ・プランの誕生と「サラマンカ声明」には約70年の隔たりがある。したがって、「サラマンカ声明」には「ストリート・チルドレン」など草創期のイエナ・プランにみられない言葉も登場する。しかし、両者のまなざしは、障害児にとどまらず広がりを見せている。この点で両者に親和性はみられる。ただし「サラマンカ声明」は、特に傷つき困っている人々の課題解決から出発しようとする。それに対して「混合」の場合は、必ずしもそこに出発点を置くわけではない。

以上のように、「混合」はインクルーシブ教育との関連で位置づけることができる。ただし、インクルージョン(包摂)と「混合」は「言分け」されるように、両者の間で微妙なニュアンスの違いも感得される。その差異を、誰もが分け隔てなく、また、傷つくことなく、困ることなく生きられる多様性社会の実現と関連付ければ、次のようになる。すなわち、インクルージョン(包摂)の場合は、同質性の高いマジョリティーの中へ、異質性の高いマイノリティーが徐々に組み込まれることによって(包摂)、一人一人の違いが尊重される多様性社会を実現していこうとする。ただしこれは同質性が前提で成り立っていた当該社会(マジョリティー)が、異質なマイノリティーを同化するものではない。むしろこれは当該社会が同質性重視から異質性重視へと徐々に変化していくことを目指している。一方、「混合」においては、もともと異質な個人が集まり、交わることによって(混合)、一人一人の違いが尊重される多様性社会を実現していくことになる。この場合、当該社会の中で異質性は最初から前提とされているのである。

このように、インクルージョンと「混合」は、共に多様性社会の実現に向かう思想・実践という点で共通性をもつ。ただし、同質性と異質性のいずれが基軸かという点で、両者には違いもみられる。この違いをどのように理解するか。この問題については、今後さらに検討していく。

(2) インクルーシブ教育実践の萌芽 草創期のイエナ大学附属学校での取り組み

ペーターゼンは、「イエナ・プラン」という呼称が誕生する1927年の3年前から、イエナ大学附属学校で彼の教育実践に取り組んでいた。当時のイエナ大学附属学校では、いかなる教育実践がなされていたか。それを知るための最初期の手がかりとなるのが、ペーターゼンとヴォルフ(Hans Wolff)の共同執筆による最初の実践報告書、1925年の『労作・生活共同体学校の諸原則に基づく基礎学校』(参考文献・資料、以下『基礎学校』と略記)である。『基礎学校』には1924年4月28日から1925年3月28日まで、実質38週間にわたって行われた附属学校最初の実践記録が掲載されている。この記録から導き出される草創期のイエナ大学附属学校における教育実践の特質について、教育実践の場所、自然な学習、子供の自発性と多様性、教師の役割、学校共同体における親の観点からまとめていく。

教室から居間へ：草創期の教育実践から見えてくることは、第一に教育実践が繰り広げられる場所の重要性である。通常は教室と呼ばれる場所を、附属学校の子供たちは「自分たちの居間」と捉えた。大学の事情で1学年から4学年までの子供たち21名に提供された授業部屋は、わずか1室だった。設備も十分ではなかった。しかし彼らは、まるで家庭の居間のように、この部屋に花や植物、興味関心のある材料を持ち込み、まさに「自分たちの居間」を中心に廊下や庭へと自由な活動を繰り広げ、学校生活への愛着を形成していった。

自然な学習の生成：草創期の附属学校では当初、時間割が未確定であった。したがって各授業時間の教材も未確定だったわけである。実践記録の中に繰り返し目撃されるのは、子供たちの興味関心や、持ち込んだ材料が教材となって自然に学習が展開していく場面である。それは個別の学習だけでなく、グループで取り組む学習場面でもみられた。合科授業は、冬学期の時間割に明記されているが、それ以前の夏学期には明記されていなかった。しかし夏学期において既に、例えばある子供が家から持参した5枚の短冊「ハンス・ハインツが想像する世界一周の旅とは」が契機となって合科授業が展開している。

子供の自発性と多様性：附属学校の記録によると、開校初日から、子供たちは自分の興味関心に従って題材を選び、

学習や遊びを展開している様子が窺える。読書をする子供、黒板で計算する子供、スイセンの花を描く子供、新入生のために詩や朗読、歌の提案をする子供、花びらで掲示をつくる子供、等々。誰に強制されることもなく子供たちは自発的に活動し、しかも彼らの多様な活動が、ここではお互いに尊重されている。子供たちが仲間に喜んでもらおうと「自分たちの居間」に家から持ち込んだ花や植物、5つの短冊のような題材が注目され、尊重され、教材化へと発展することもある。附属学校では第1学年から第4学年までの異年齢の子供たちが年間を通じて同じ「自分たちの居間」で一緒に学校生活を送っている。これだけでも通常の学年別学級とは異なるが、子供たち同士の直接的な関わりにおいてのみならず、多様な題材、教材を媒介する間接的な関わりをも通じて、子供たちのインクルージョンの機会が自然に醸成されている。

教師の役割：これまで述べてきた「自分たちの居間」、自然な学習、子供の自発性と多様性の醸成に関与しているのが教師ヴォルフの役割である。教師としてのヴォルフは通常の学年別学級の教師とは異なる役割を演じている。彼は子供たちに権威者として一方的な指示を行ったりしない。いわゆる学級王国はここには存在しない。実践記録の中に彼が書き残した次の言葉、すなわち「子供たちの邪魔をしない。そうした取り組みが続く」（参考文献・資料 87頁）は、彼の教師としての役割に通底する考えであった。特定のカリキュラムと時間割の遂行が前提となる通常の教師であれば「子供たちの邪魔をしない」を徹底することは困難であろう。しかし、附属学校の学校生活は、そうした前提のないところでまさに「試行（Versuch）」が始まったのであった。「子供から」の教育、子供の興味関心や自発性、多様性の尊重を、旧来の授業の枠組みから離れて実践する「試行」が、まさしく附属学校で開始されたのであった。

学校共同体における親：もう一つ重要な指摘をしておかねばならない。それは学校生活が単に子供と教師によって成り立っていないことである。むしろ、子供、親、教師の3者による共同体が附属学校の実践を支えていたのである。附属学校の報告書『基礎学校』には、学校生活への親の関与の記録が多数残されている（例えば、庭の手入れ、講演、旅行時のサポート、クリスマスの飾り付け等々）。ヴォルフは親との関わりを重視していた。校長のペーターゼンも同様の見解であった。彼は附属学校においては親の承認と協力が重要だと考えていた。

(3) 草創期のイエナ大学附属学校の実践が示唆するもの

近年、我が国においてイエナ・プランへの関心が高まり、新学校の設立やコンセプトの受容が広がりをみせている。その理由として、イエナ・プランと新学習指導要領との親和性や「オープンモデル」としての柔軟性などが指摘される。「令和の日本型学校教育」の実現が目指されている今日、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実を目指す我が国の教育界において、イエナ・プランは種々の有力な手がかりを提示しうるものである。とはいえ、我が国の教育改革への貢献という巨視的な視点からだけでなく、ヴォルフのように目の前の子供から出発する微視的な視点を忘れてはならないだろう。もしイエナ・プランと教育改革推進の陰で、ヴォルフが大切にしようとしたような子供たちの自発性が損なわれ、「子供たちの邪魔をする」事態が生じてしまうならば、それは本末転倒であろう。何のためのイエナ・プランか。草創期の実践記録は、そうした原点を問い直す契機を提供しているとも言えよう。

本研究では、草創期の実践記録『基礎学校』の負の側面についての考察まで論を進めることができなかった。大学と附属学校の事情とはいえ、この学校では1924年の開校当時、第1学年から第4学年までの混合が行われていた。後年ペーターゼンは、1929年の『イエナ・プラン』第2版の中で「綿密な観察」の結果、教育的にみて第4学年を第3学年までから引き離すべきと述べている（参考文献・資料 24頁）。さらに1932年の同書第3版では、基礎学校を痛烈に批判し、4学年の混合を拒否した（参考文献・資料 41頁）。4学年混合の問題点を明らかにする観点から、『基礎学校』の実践を精査していくことは、今後の課題としたい。

(4) インクルーシブ教育をいかに展開していくか

既にインクルーシブ教育が共通の枠組みとして重視されている現代日本の教育界であるが、それをいかに展開していくか。これまでの教育の仕組みを改めてインクルーシブ教育システムを構築していくことは、制度改革を伴う「大きな改革」のように見られるかもしれない。しかし現行の制度下で行われる日々の「小さな改革」としてインクルーシブ教育を展開していく可能性はあるだろうか。実はイエナ・プランの創始者であるドイツのペーターゼンは、そうした「小さな改革」を「内的学校改革」と呼んで重視していたのである。イエナ・プランによる「内的学校改革」は、具体的には従来の学校にみられる年齢別学年学級制、教師主導の一斉授業形態そして教科カリキュラム型の時間割編成からの脱却となってあらわれた。すなわち、インクルーシブ教育の源流と評された「混合」（異なる年齢・階層・能力の男女を混ぜ合わせた生活）、子供中心の学習形態（対話、遊び、作業、行事など）、学校生活のリズムを重視する週案の導入などである。これは一見すると「大きな改革」のように見えるが、そうではない。ペーターゼン自身が取り組んだのは学校制度の改革ではなく、学校内でできる教育機能の変革であった。21世紀の現在においても、そのような「小さな改革」が公教育の枠組みの中で十分に成立していることは、ドイツ現地のイエナ・プラン校の実例が示している。そして、このような「内的学校改革」が工夫次第で日本の現行の教育制度下で実現可能なことは、日本最初のイエナ・プラン校（大日向小学校）が学校教育法第

1 条に規定する正規の学校として誕生したことから明らかであろう。このような「内的学校改革」の実例をさらに積み上げ、教育界で共有していくことが大切である。

<参考文献・資料>

Gronert u. A. Schraut (Hrsg.), *Handbuch Vereine der Reformpädagogik. Überregional arbeitende reformpädagogische Vereinigungen sowie bildungsentwicklerisch initiative Einrichtungen mit Brückenfunktion in Deutschland, Österreich, der Schweiz, Südtirol und Liechtenstein*, Baden-Baden: Ergon Verlag 2018.

Peter Petersen, *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*, Beltz 1927.

Peter Petersen, *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*, zweite erweiterte Auflage, Beltz 1929.

Peter Petersen, *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*, dritte neu durchgesehene und vielfach erweiterte Auflage, Beltz 1932.

Peter Petersen und Hans Wolff (Hrsg.), *Eine Grundschule nach den Grundsätzen der Arbeits- und Lebensgemeinschaftsschule*, Weimar: Hermann Böhlau Nachfolger Hof-Buchdruckerei und Verlagsbuchhandlung G.m.b.H. 1925.

Seitz, O., Inklusion und Jenaplan. Ein stark gekürzter Auszug aus dem gleich betitelten Artikel in: Grubich, R. (Hg.): *Inklusive Pädagogik*. Ranshofen-Osternberg/Österr. 2005. <http://jenaplan.de/wp-content/uploads/2015/04/inklusion-für-Homepage.pdf> (最終閲覧日: 2020年1月8日)

UNESCO and Ministry of Education and Science (Spain), *The Salamanca Statement and Framework for Action on Special Needs Education*. Adopted by the World Conference on Special Needs Education: Access and Quality, Salamanca, Spain, 7- 10 June 1994. (<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000098427>, 最終閲覧日: 2020年1月7日)

なお、本報告書のもとになった筆者の論文等は次の通りである。基本的には原著の内容と論理展開を尊重したが、本報告書の執筆に際し、紙幅の都合上、編集、加除修正をほどこした箇所がある。

佐久間裕之「イエナ・プランにおけるグループ形成の鍵概念としてのミッシング インクルーシブ教育におけるその位置づけ」『玉川大学教育学部紀要』第19号、2020年、25 - 42頁。

佐久間裕之「草創期の『イエナ大学附属学校』における教育実践の特質 『労作・生活共同体学校の諸原則に基づく基礎学校』(1925)を手がかりに」『玉川大学教育学部紀要』第22号、2023年、23 - 44頁。

佐久間裕之「第15章 教職の今後にむけて」津田徹・広岡義之編著『教職論』ミネルヴァ書房、2021年、197 - 210頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 佐久間裕之	4. 巻 22号
2. 論文標題 草創期の「イエナ大学附属学校」における教育実践の特質 『労作・生活共同体学校の諸原則に基づく基礎学校』（1925）を手がかりに	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 論叢 玉川大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 23, 44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15045/0002000040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SAKUMA, Hiroyuki	4. 巻 No. 70, Special Issue
2. 論文標題 Peter Petersen's Mischung as a Key Concept of Grouping in the Jena Plan. Its Contemporary Significance in the Context of Inclusive Education.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 New World of Education. Journal of WEF Japan Section, No. 70, Special Issue.	6. 最初と最後の頁 77-78, 157-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐久間裕之	4. 巻 2019
2. 論文標題 イエナ・プランにおけるグループ形成の鍵概念としてのミッシュング：インクルーシブ教育におけるその位置づけ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『論叢：玉川大学教育学部紀要』19号	6. 最初と最後の頁 25, 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SAKUMA, Hiroyuki	4. 巻 15
2. 論文標題 Sumie Kobayashi and Petersen 's Jena-Plan: A Typical Case of the Acceptance of Western Pedagogy in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Contemporary Philosophies and Theories in Education 15, D. Lewin/ K. Kenklies (ed.), East Asian Pedagogies, Education as Formation and Transformation Across Cultures and Borders, Springer	6. 最初と最後の頁 191, 202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-030-45673-3_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 SAKUMA, Hiroyuki	4. 巻 41
2. 論文標題 Neue Trends der Jenaplan-Paedagogik in Japan: Die erste echte Schule und neue Herausforderungen	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 KINDERLEBEN	6. 最初と最後の頁 32, 35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 SAKUMA, Hiroyuki
2. 発表標題 Peter Petersen's Mischung as a Key Concept of Grouping in the Jena Plan. Its Contemporary Significance in the Context of Inclusive Education.
3. 学会等名 The 45th World Education Fellowship Tokyo International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐久間裕之
2. 発表標題 ペーター・ペーターゼンの思想
3. 学会等名 日本イエナプラン教育協会「第4回日本イエナプラン教育全国大会」(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 佐久間裕之 (編著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 玉川大学出版部	5. 総ページ数 278
3. 書名 教育原理 (改訂第2版)	

1. 著者名 佐久間 裕之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 玉川大学出版部	5. 総ページ数 232
3. 書名 教職概論 改訂版	

1. 著者名 佐久間裕之	4. 発行年 2024年
2. 出版社 学校法人玉川学園DTS	5. 総ページ数 112
3. 書名 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号19K02458)「イエナ・プランにおける『混合』を用いたインクルーシブ教育に関する研究」研究成果報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------